

研究ノート

高校におけるキャリア教育と教師・生徒・保護者の連携

The career education in the high school and a partnership between teachers, students and parents.

久津間文隆

Fumitaka KUTSUMA

Key words : キャリア教育, 進路指導, 中堅校

1 はじめに

「平成28年度埼玉県教育行政重点施策の推進に当たって」では、三つの最重要課題を位置づけている。その一つが「確かな学力の育成」、二つ目が「グローバル化に対応する人材の育成」、三つ目は「社会的に自立する力の育成」である。三つ目では、社会的自立の基盤となる自己肯定感や規範意識をしっかりと持たせ、学ぶこと、働くことへの関心や意欲を高めて、進路指導と学習の結びつきを強める必要があると述べている。

この「社会的に自立する力の育成」の推進事業の一つとして、小・中・高等学校における組織的・系統的なキャリア教育の充実をめざし、「生徒の心に火をつける！高校生キャリアアップ&学力アップ推進プロジェクト」を掲げている。大学進学や就職など進路先が多様な“いわゆる中堅校”の生徒に対し、目標や目的意識を明確化させ、キャリア意識の向上を図ることにより、学習意欲を向上させ、学力向上を図っていこうという事業である。

筆者は、県立高校の教員生活の最後の5年間を埼玉県教育委員会のいうところの“いわゆる中堅校”に勤務し、そのうち3年間を進路指導部のチーフとして校務にあたった。ここでは、この経験を通して感じたキャリア教育・進路指導について紹介する。なお当該する勤務校については、中堅校とした。

2 高校におけるキャリア教育は・・・

高等学校学習指導要領（平成21年度告示）の総則の第5款 教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項ではキャリア教育について、以下のように述べている。

「学校においては、キャリア教育を推進するために、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、産業界における長期間の実習を取り入れるなど就業体験の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得るよう配慮するものとする。」

「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること。」

また、埼玉県総合教育センターによる「中学校初任者研修用、H28年度研修参考資料」のなかで、進路指導とキャリア教育について、「キャリア教育は、生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育であり、その中核をなすのが進路指導である。進路指導は、生徒が自らの生き方を考え、将来に対する目的意識をもち、自分の意志と責任で主体的に進路を選択し決定することができるよう、指導・援助することである。」と述べられている。

進路指導とキャリア教育はこのように定義されているものの、高校の現場ではキャリア教育という概念は浸透してはいないため、ほぼ同義として使われていると考えても差し支えないであろう。

中堅校の進路指導部では、「自立する力の育成」という視点での進路指導が行われているものの、生徒の心に火をつけられたか？キャリアアップ、学力アップがはかられたか、それは従来の数値第1の「出口指導」や「進路決定指導」では結論づけられるものではない。授業、部活動、生徒会活動や各種行事を通して指導に当たってきたことが、結果的にはキャリア意識の向上を図ることになったはずであり、いくつかの実践例を紹介したい。

3 中堅校における取り組み

いわゆる中堅校に限らず高校では毎年「進路のてびき」なる冊子を生徒全員に配布している。その学校の実態にあわせて進路指導部で編集・作成した生徒向け進路指導に関する小冊子である。

勤務していた中堅校では、進路指導の考え方、本年度の進路希望状況、学年目標・進路指導年間計画、就職のてびき（民間、公務員）、進学のとびき（4年制大学、短期大学、専門学校、看護学校）、卒業生の進路決定状況、進路体験記などからなる「進路のてびき」を毎年更新して生徒全員に配布している。この冊子には、このように進路にかかわる情報が満載されていて、これとLHRや進路行事に活用する書き込み式の「進路ノート」とを併用して3年間の進路指導が進められている（図2）。

(1) 進路指導がキャリア教育の中核

中堅校で配布していた「進路のてびき」の冒頭では、生徒へ次のような投げかけをして、学校の進路指針を紹介している。少し引用してみたい。

『1. 進路を決定するにあたって

人生には、何回か大きな選択に迫られる時があります。高校卒業時の進路決定もその一つです。では、皆さんが進路を決める際に大切なことはなんでしょうか。まず、自分の将来を、自分自身で考え決定し創り出していく、それを自覚することです。次に、自分の興味や関心、個性・適性・能力がどこにあるのか、どの程度なのかを把握し、それらを伸ばしていくことです。さらに、進路希望を実現するために、大学・短大・専門学校や会社等を詳しくしらべ、適切な情報を収集し、その上で必要な準備・努力を続けていくことです。そうすれば進路は必ずひらけます。（後略）』

つづいて、2 進路選択における基本的態度 へとつづく。ここでは、〈自分を知ろう〉〈情報を得よう〉〈自分の力で進もう〉の3つをあげている。最初の〈自分を知ろう〉では、次のように述べている。『まず、自分が

将来どう生きて行きたいかを深く考えてみよう。自分の興味・関心・適性・能力を改めて問い直し、将来何をやりたいかを考えてみよう。その際には社会の動きや家庭の状況にも目を向けよう。（後略）』

このような進路指導方針のもと、以下のような学年目標をたてて、進路行事などの指導計画が立てられている。

『1学年 自分の適性を知って、将来を展望しよう

2学年 志望する分野の情報を得て、各自の進路を具体化しよう

3学年 希望する進路を実現しよう 』

つまり、中堅校における進路指導は、出口のネームバリューや数を問題にする「出口指導」や「進路決定の指導」ではなく、キャリア教育のうたう生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができることを意識した指導を柱としている。

さらに、「進路ノート」では次のような呼びかけをしている。

【1年生へ】 1年生の皆さん、入学おめでとうございませす。（中略）高校生活の課題は、一人ひとり異なりますが、卒業後の進路、つまり将来どのような道に進むのか、どういう人生生きていくのかを模索し、どんな職業についていくのかを考え、それを実現するための準備をしていくこと、これは皆さん全員にあてはまる高校生活の最重要課題となるのです。（後略）

【2年生へ】 2年生の皆さん、高校に入学し1年以上が経過しました。（中略）進路を考えていくことは、単に進学先や職先を決めることではありません。これからの人生をどのように生きていくのかを考えその上で具体的な卒業後の進路先が導き出されていくことが大切です。自分の将来と正面から向き合って、自分自身の進路を創造し現実のものとする準備を進めて下さい。

【3年生へ】 3年生の皆さん、高校生活も1年足らずとなりました。（中略）もう一度自分はどういう将来を、どういう人生を生きていこうとしているのかを自身に問いかけてみて下さい。（後略）

中堅校での進路指導は、キャリア教育でいう「自己と働くこととの関連付けや価値付けの累積」を意識して取り組んできたわけではないが、結果的に「生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」になっている。このように進路指導がキャリア教育の中核をなすものであるとともに、日頃の教科活動、生徒会活動、部活動があつてこそ進路の歯車がまわるものであるという教員間での共通理解があつた。

この点は新入生説明会などあらゆる機会を通じて、保

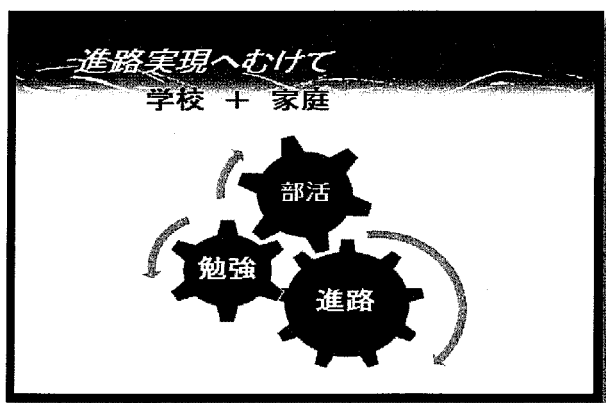


図1 新入生説明会のスライドから

護者に対して説明してきた(図1)。

また、生徒へ向けては、進路行事や学年集会のたびに、なぜ学ぶのか、なぜ自分の将来設計を考えていくのか、を意識して講話するように努めた。

以下は、4月当初の3学年の集会での講話の一部である。

『皆さんにとって、これからの1年は、長い人生の中でも非常に貴重な1年になります。卒業後の進路を、進路希望を実現、決定していく年になるからです。(中略)今、各クラスで進路希望調査を行っています。未定者の数は12名です。一人一人卒業後の進路に対する準備がすすんできていると感じています。ところが、単に大学、専門学校ということだけで、具体的な展望をもてない人も多いのではないのでしょうか。自分は将来、どういう人生を歩んでいこうとするのか、どういう道に進み、具体的には、どのような職業についていくのかということになると思います。例えば自分は公務員を考えている。将来は消防士か警察官になりたいとか、食品を扱う会社に就職して、新しい製品開発の仕事をしていきたいとか、具体的な形で、それを示すことの出来ない人もいます。そこが見えてこない卒業後の具体的な進路を決めることができません。でも、自分自身の人生です。時間をかけて具体的なものにして下さい。

進学を希望する人は、何を目的にした進学なのか、何の勉強をするための進学なのか、そこをもう一度考えて下さい。その上で4年制大学なのか、短大なのか、専門学校なのか、大学であれば学部、学科をどうするのか。短大・専門学校であれば学科・コースは何かを選ぶのか?それは将来進みたい道、職業で、またはさらに何を勉強したいかで決まってくると思います。(中略)

以上、進路について話をしてきました。3年生全員このからの健闘を期待しています。』

(2) 多様な進路実現にむけて 教員間の連携

中堅校における第3学年の1年間の進路指導は多忙をきわめる。進路に関する行事のみならず、3年生が中心となり運営されていく体育祭(6月)と文化祭(9月)がある。とくに9月当初、文化祭と並行して面接指導などの就職試験への取り組みが本格化するとともに、公募推薦、指定校推薦への取り組みなどを行わなければならない。文化祭を担当する生徒会系の教員との調整が必要になってくる。

これだけのプログラムをこなしていくためには、進路指導部だけでは到底賅いきれない。各学年の進路指導部教員には、これとは別に1学年・2学年の進路行事が学期ごとに組まれている。とくに、AO入試、公募推薦、指定校推薦とつづく10月~11月が正念場である。

推薦入試へむけての面接指導と推薦にかかわる志願書小論文指導がかかせないものとなる。100名をこえる面接指導には、進路指導部では手が足りず担任・副担任の協力なくしては対応しきれない。また、小論文指導では、国語科の教員に過重な負担がいかないように、志望校、志望学部に応じて、スポーツ系は体育科、語学系は英語科、家政系は家庭科などすべての教科に割り振って指導にあたっていた。これには、学校全体で生徒一人ひとりをバックアップしていこうという土壌が培われていて、スムーズにすすめることができた。

(3) いくつかの取り組みの中から

進路指導部の限られた人数のなかで、新しい取り組みを始めるには、ひとつ仕事をそぎ落とさないと、一人ひとりの教員に過重な負担が生じることになる。

その中で1つだけ新しい企画を提案し実施させてもらった。3学期の学期末に行った「学ぶ愉しみ—大学の授業を経験してみよう—」である。当時、中堅校では、大学への進学者は増加傾向にあるものの、安易な進路選択による大学中退者の存在が気になってきた。前述してきたように、生徒一人一人のキャリアを育成することを主眼に進路指導をすすめてきたものの、最終的に何を学ぶかという意識に欠け、入れる大学へという選択がなされてしまう。

この行事の趣旨には次のように書いた。「この講義は、学問へとりくむ視点、学ぶことの愉しさに触れてほしい・・・という進路指導部の思いから企画されたものです。高校の授業の2倍の90分授業で行われます。この経験が、普段の授業や家庭学習への意欲へとつながっていくのではないかと考えています。」

2013年3月は3つの講義を実施した。理学療法「よい姿勢、悪い姿勢」、心理学「やる気の心理学」、脳科学「ストレスと運動の不思議な関係」である。有りがたいことに大学では、高校へ出向いての出張（出前）授業の取り組みが実施されていて、これを活用した。以下、受講した生徒の感想である。

- ・さまざまな新しい知識を知ることができました。友だち同士でいろいろと確認し合ったり実践したりして楽しく学ぶことができました。きょう教わったことから意識していきたいと思います。
- ・おもしろかった。自分も他人と比べてしまい、うまく勉強ができないということがあったので、少し気持ちが楽になった。学力コンプレックス解消しそうかも！

試験もない、評価もない、このような講義を受講することは、生徒にとっては学ぶ楽しみを味わうことのできる数少ない機会である。また、高大連携の一つとしてもよい機会であった。

(4) 家庭・保護者との連携

進路指導部の責任者となり、いくつかの問題に直面した。最も痛感したのは、家庭・保護者へ情報を発信し、家庭・保護者との連携を深めることの必要性であった。今の親世代は、高校生ともなれば、人生は自分で切り開け、親になんか頼るな、という筆者らの世代の感覚と異なるところにあった。大学説明会やオープンキャンパスでは親子同伴は当たり前になり、家庭への情報提供は欠かせないものになっている。そこで、なるべく多くの機会をとらえて進路の話をさせてもらうようにした。

まず、生徒の保護者全員の前で進路方針を紹介できるのは、入学前に行われる入学許可候補者説明会しかない、この機会をのがすことはない、教務部、生徒指導部、保

健部などのなかに割り込ませてもらい、進路状況、進路の取り組み、そしてもっとも伝えなかった3年後にかかる進路支度金（入学金など）のことを紹介した。実は、AO入試・推薦入試などによる入学決定後にかかわる金銭面でのトラブルがもっとも多かった。

P T A 総会（5月）、P T A 主催「進路バス見学会」（6月）、進路講演会（11月）などでも積極的に進路情報を提供することにした。情報提供する機会が増えるとテキストが必要になった。生徒に配布してある進路のてびきをご持参くださいというアナウンスをしても、なかなか難しい。そこで、思い切って「進路のてびき・保護者版」を作成することにした。これは生徒版から体験記を除外した内容のものである。経費は多少の増額で作成することができた。保護者への配布は、担任に協力してもらい、6月の保護者面談の機会を利用して直接保護者に手渡しをすることにして、全保護者に配付した。

進路関係の説明会で紹介する最後のスライドでは、家庭・学習・部活動・友人関係この一つ一つがキャリアの蓄積につながり、これらが有機的につながってこそ、進路実現が果たせることを強調した（図3）。

5 日頃の教育活動＝キャリア活動

このように“いわゆる中堅校”では、生徒の進路は、就職、専門学校、大学などと多岐にわたっており、かつては就職からはじまった3学年の進路指導は、入試の多様化によって、1学期から大学・専門学校への入試指導がはじまり、1年間絶え間なく進路指導が続くことになった。大学側がAO入試、公募推薦、指定校推薦など高校3年生の青田刈りをやめない限り、中堅校などの高校現場の進路指導における多忙化はおさまることはないであろう。

中央教育審議会答申2011年のなかで、社会的・職業的

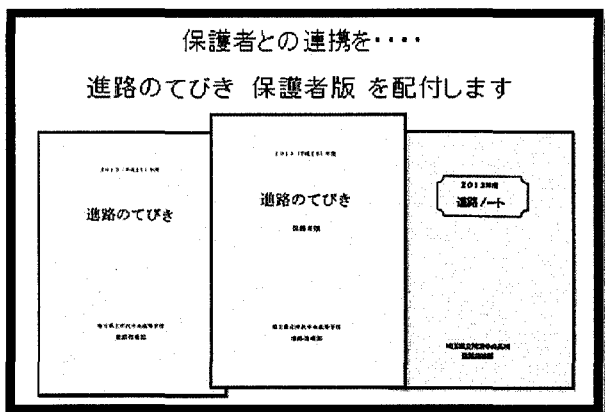


図2 3点セット 保護者版「進路のてびき」作成

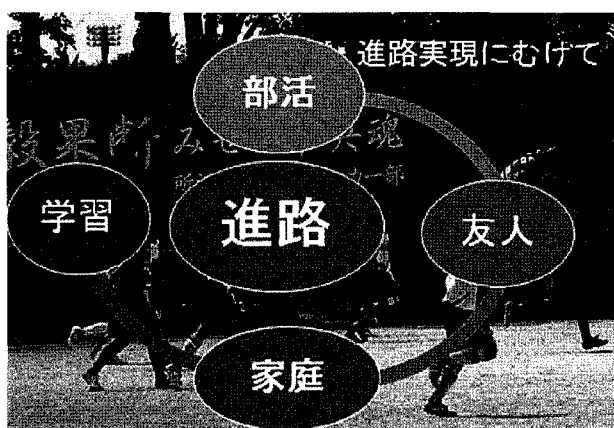


図3 進路の実現には説明会のスライドから

自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力として、基礎的・基本的な知識・技能のほかに、基礎的・汎用的能力として、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力について述べられている。これらは、特別の講義で身につくものではなく、従来通りの部活動や生徒会活動などの日頃の教育活動で養われるものである。

さらに、高校での道德教育の導入に関連して、文科省教育課程部会の道德教育ワーキンググループの中では道德とキャリア教育との関連性について意見が相次いだという。道德教育の目標を「人間としての在り方生き方を考える」として、「道德の実践の一部をキャリア教育でつなげてはどうか。生き方在り方をインターンシップで学習できる」という意見が紹介されている。（「教育新聞」2016年6月16日）

中堅校、職業高校をのぞくいわゆる進学校における進路指導は、有名大学合格という「出口指導」や進学指導に重点を置き現役合格率〇%を競うような「進路決定の指導」に終始してきた。次期学習指導要領に向けた審議でも、キャリア教育の重要性が指摘されており、さらに、一人一人のキャリア発達をうながす指導に転換していくことが求められてくる。もちろん、進路指導の取り組みは、キャリア教育の中核をなすものであり、生徒一人ひとりを大切にした進路指導がすすめられていくことには違いない。

参考文献

- 「高等学校学習指導要領平成21年3月」（平成21年）
 「平成28年度埼玉県教育行政重点施策の推進に当たって」
 （2016年 埼玉県教育委員会）
 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（平成16年1月）
 「教育新聞」2016年6月16日
 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（2011年1月）